

2025. 12. 26 「愛と知の循環」としての保育

無藤隆先生の『「愛と知の循環」としての保育—世界を愛することを学ぶ—』が本園にも届きました。

届いてからずっと読み進めています。『「愛と知の循環」』について、理論的にとても分かりやすく記されています。「好きが広がり、世界をひらく」を研究主題としている本園としても、まさしくこの本はバイブルです。さらに、これからの研究についての道しるべになっていくと思います。

その中で、「遊びのストーリーと灌木的展開」のところ。

少し引用させていただくと、「子どもの遊びは、短い時間で終わることもあるが、それが次の日・週の遊びへと連なり、発展していくともある。遊びはその都度、子供の環境への出会いから生じ、気まぐれや偶然を含み込み、またしばしば仲間からのアイデアを取り入れて展開するから、先が予測できるわけではない。いくつも可能性が開かれ、その都度にその一つへと分岐して展開する。そこに遊びの一貫性と多様性の両面の混淆が起こり、それもまた遊びの面白さである。さらに環境への出会いと活動の発展の多様な在り方が生まれ、その錯綜した複雑さの中で、環境への多様なものと在り方への肯定的知が成り立つ。同時に、そこでの筋道が、思い出し、予想し、また先の目標イメージを立てる中でつくり出され、構成していく遊びの活動の深さが生まれていく。それは、一つの可能性の実現だが、同時に他の可能性を中断することでもある。そういういくつもの、中断したり、横にそれたり、時間をかなりおいて復活したり、といったことが起こって進む中で、一つのやり方が定着することもあり、また他のやり方の可能性がいくつも見えてくることもある。」

これを灌木的展開と無藤先生がおっしゃっているが、まさしく今年度の子供たちの姿を見てみると、そうだな〜としみじみ感じていました。

本園の研究集会でも、シンポジウムでおっしゃっていた「灌木的」展開。本園の研究副題は「遊びにおける展開の可能性を探る」ですが、この本を読みながら、より子供たちの姿がいくつも浮かび、具体的に灌木的展開として考えると、クリアになってきます。この灌木的展開に価値を感じ、いかに大切にできるのか。むりやり一つのストーリーにもっていくのではなく多様に広がっていく中で、好きが重なり、また異なる様々なものが入り混じる「混淆（こんこう）」が起こり、子供たちなりの新たな世界を切り開いていくのか。考えるだけでワクワクします。

これは本書の一部分ですが、この本を読んでいると、いろいろなところで園の子供たちのリアルな姿、実践が浮かんできます。そして、本を読みながら理論と実践の往還をし、自分自身も深まっていく感じがします。

また職員みんなでじっくりと読み解いていきたいと思っています。

